

意味と歴史：メルロ＝ポンティの歴史哲学

円谷，裕二
九州大学大学院人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/1456214>

出版情報：哲學年報. 73, pp.1-18, 2014-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

意味と歴史

—メルロ＝ポンティの歴史哲学—

円 谷 裕 一

はじめに

歴史は進歩するのであろうか。また歴史には目指すべき目標なり目的があるのだろうか。歴史の未来を楽観的に見ようが悲観的に見ようがいずれにしても、従来の歴史哲学は概して言えば、歴史が部分的には偶然に翻弄されて紆余曲折を経ながらも大筋としては或る一定の方向に進んでいくものだという前提に立っていた。あるいは「歴史は繰り返す」と言われるように、古代ギリシアにおける自然の円環説に基づく歴史の循環という見方もある。

メルロ＝ポンティは、従来の目的論的歴史観を厳しく批判するが、それにもかかわらず歴史を無目的だとか偶然の出来事の単なる継起とは見なせずに「歴史は意味をもつ」と主張する。本稿では、彼の歴史哲学の鍵概念である「歴史の意味」ないし「歴史の論理」とはどういうことなのかという問いを導きの糸としながら彼の歴史哲学を考察してみたい。

彼はみずからの歴史哲学を構想するにあたって当時の言語論、とくにソシュールの言語論を手がかりにしてい

る。彼の歴史哲学は、『知覚の現象学』（一九四五年）での、身体主体と知覚世界の相互内属についての現象学的基礎分析を前提としながら、それを言語や心理や社会や歴史などの具体的領域に応用し、それによって現象学と人間諸科学を媒介するという構想のもとに展開されている。その際にとくに言語論との関連を強く意識しながら歴史現象を「歴史の意味」や「歴史の構造」という観点から考察している。

彼の歴史哲学の著作としては、『知覚の現象学』第三部第三章「自由」のほかに、例えば、マルクス主義やヘーゲルの歴史哲学に関する諸論稿を収めた『意味と無意味』（一九四八年）、『知覚の現象学』を実践的な歴史世界へと拡大した『ヒューマニズムとテロル』（一九四七年）、一九四九年から一九五二年にかけての一連のソルボンヌ講義、さらにはマルクス主義およびそれを擁護した自分の立場を批判的に展開する『弁証法の冒険』（一九五五年）、あるいは『シーニユ』（一九六〇年）所収のいくつかの論文などがある。

第一節 従来の歴史観への批判

ソルボンヌ講義『意識と言語の獲得』においては、ソシュールの言語論を人間諸科学の基礎づけとして一般化する一環として歴史哲学の探るべき道を提示している¹⁾。それは次の二つの極端な歴史理解を批判しつつ、それらのいわば「あいだの道」（CA85）を採る歴史哲学である。

- a. 歴史は相互に独立な出来事やさまざまな偶然的寄せ集めである（クレオパトラの鼻）。
- b. 歴史は神の摂理であり、内的なものの顕現であり、理解可能な一つの展開である。（CA85-86）

前者は、歴史のうちにかなる「意味」をも認めずに、歴史を、偶然的で無意味な出来事の単なる集合ないし

時間的継起と見なす立場である。ここにおいて歴史は、理解可能な意味のないし文化的な現象ではなく、無意味な事実として、客観的記述の対象か、あるいは、自然現象と同様に因果的説明によって接近可能な客観と見なしうるであろう。

近現代の自然科学は、自然現象のうちに、理解されるべき何らかの意味や目的を認めることなしに、ただ物質の機械的な因果連鎖だけを読み取るという基本姿勢のもとで自然を「説明」する。自然科学主義の立場に立つことによって、歴史現象を自然現象に還元するという実証主義的な歴史観が生じてくるのである。

他方、後者の歴史観は、歴史現象を神力的とか絶対精神や人間の意図や意識に基づく制作物と見なすことによって歴史を理性的に認識可能なものと考ええる。つまり歴史は神や人間の志向性によって付与された意味をもっており、それゆえ歴史はその意味が目的論的に把握されうることもなる。

この歴史観にはさまざまなバリエーションが考えられよう。例えば、キリスト教の終末論的歴史観とか、その世俗化としての目的論的歴史観、すなわち、歴史の全過程をあらかじめ定立された究極目的の実現のための必然的手段と位置づけることによって、歴史のうちから一切の偶然性を排除し、一見偶然性に見える出来事を目的合理的に整序可能なものと見なす歴史観である。神学的であれ哲学的であれいずれにしてもこれら両者は、最終目的を旨とす必然的で機械的な過程として歴史を理解しようとしている。しかしながらこの場合に、最終目的への到達によって歴史の歩みは完結してしまい、それゆえに歴史はそこで停止するという有限な歴史観に陥るであろう。あるいはこれほど極端な目的論ではないにしても、歴史のうちに何らかの不定の目的ないし目指すべき理想を仮設して、それに向かって歴史はじよじよに進歩してゆくのだという楽観的な進歩史観も考えられよう。

あるいはまた、目指すべき目的を未来に設定するのではなく、むしろ、過去を振り返る現在の時点を経る歴史の頂点ないし到達点と位置づけて、過去の全過程を現在に至るまでの単なる原因とか手段に貶めてしまうような歴史

観も考えられよう。このような歴史観についてメルロー・ポンティは次のように語っている。

ボシユエ（『世界史叙説』）とヘーゲル（『歴史哲学』）の歴史理解には、結局のところ、精神が世界を導き、歴史的理性が「諸個人の背後に」働いているというように、歴史的運命を認めるといふ共通点がある。実のところ、これは回顧的合理化（ベルグソン、アロン）のように思われる。理念が歴史の原因として働く理念に見えるのは事後的に振り返つてのことであり、また理念の現実化の諸条件が仮定からしてすでに与えられているからなのである。（CA86）⁽²⁾

「回顧的合理化」が歴史哲学として問題なのは、現在を規定する原因を事後的な仕方でも過去に求めることによつて、歴史の展開を多方面に「動機づけた」はずの過去の出来事の偶然性の意義をまったく度外視してしまうことである。つまり、歴史における偶然的なもの果たす役割や、偶然に晒されながらもそれを合理的な仕方では捉え直そうとする人間の歴史的生というこれまた偶然的な営みが歴史理解から抹殺されてしまい、それによつて歴史を説明可能な必然的運動と見なしてしまう。

ところが「人間とは偶然の場であり」（HA304）、歴史は偶然性に満ちている。それにもかかわらず、例えば、ダ・ビンチの「モナ・リザ」を、あらかじめ措定された彼の性的経歴から因果的に説明したり、あるいは、彼のうちに前もって存在すると想定された「神的力量」や天才性に依拠して説明するのは、じつはあとになってはじめて到来したにすぎない「モナ・リザ」の「絵画的意味」をさいしよに前提してしまう。「回顧的錯覚」（HA304）にほかならない。こうして、「偶然が織りなす生が自己自身を振り返り自己を捉え直し自己を表現する」といふ、すぐれて人間的な契機を見落とすことになる」（HA304-305）。人間とは、目的論的歴史の単なる手段ではなく、傷つ

きやすい身体をもち、すでに語り継がれた言語や「千鳥足の歴史」(HA305)の中に置かれながらもみずからを
理解したり意味づけたりする存在なのである。

メルロ＝ポンティがみずからの歴史哲学において採ろうとする道とは、上記の二つの歴史観の「あいだの道」
である。「ソシユールが見たものはまさしく偶然と秩序の絡み合いであり、理性的なものによる偶然的なもの
の捉え直し」であったのだが、ソシユールのこの言語論をメルロ＝ポンティは歴史全体にも適用しようとする。
彼が「歴史の論理」(CA86)を「偶然と秩序の絡み合い」と見るのは、一方では、偶然的出来事の単なる羅列と
しての歴史観と、他方では、一切の偶然的出来事を目的実現のための手段と化して偶然を排除しようとする合理
化的歴史観との双方を同時に克服しようとするからである。

歴・史・の・秩・序・と・合・理・性・の・原・理・は、偶然性を排除するのではなくそれを転じて利用するのであり、ソシユール
ならば偶然を体系に変えようとでも言うであろう。歴史の原理は、純粹な出来事を排除するのではなくそれを
要請し包み込む。(ヘーゲルの考え方とは反対に) 歴史についてのマルクス主義の考え方の独創性をなすの
はおそらくこの種の観念である。歴・史・の・論・理・と呼ばれるものは、状況に応じて対処できる諸体系のみ
が存続するような排除の過程である。歴史とは、われわれの代わりに振る舞いわれわれはただ甘受するだけ
の隠れた神ではない。人間たちは、自分たちの言語をつくるように自分たちの歴史をつくるのだ。(CA86)

ただし、この引用で留意すべきは、ソルボンヌ講義の時期には、『意味と無意味』と同様に、マルクス主義を
好意的に見ており、そのために歴史を「人間たち」の共同実践によって「つくられる」と見る見方が打ち出
されている。言い換えれば、後述するように、『弁証法の冒険』で強調されるような、人間的実践に抵抗しそれ

を超越する「歴史の厚み」とか「下部構造の惰性」を十分に踏まえた歴史論とは異なり、歴史を意識的につくるうとする人間の実践的活動に期待を寄せる傾向が強い。

それでは、歴史を、単なる偶然の羅列でもなければ、あらかじめ指定された目的に向かう運動でもなく、そうかといって、「人間たち」の共同実践が歴史を構成するのでもないような、「歴史は意味をもつ」という歴史の在り方とはいかなることなのであろうか。この問題の考察のために次節では『弁証法の冒険』におけるメルロ・ポンティの歴史哲学を吟味してみることにしよう。

第二節 マックス・ヴェーバーの歴史哲学

「悟性の危機」と題される『弁証法の冒険』の第一章においてメルロ・ポンティは、マックス・ヴェーバーの歴史論を組上に載せながらみずからの歴史哲学について積極的に語っている。ここでも彼は、対照的な二つの歴史観を提示しながら、それらの「あいだの道」をゆくヴェーバーに賛意を表している。

二つのうちの一方は、「客観的歴史」、「一回限りの諸事実の継起としての歴史」(AD33)、ないし「諸文明相互を比較可能な個体と見なしてただ一列に並べるような、無関心で不可知論的な歴史」(AD3233)であり、他方は、「裁く歴史」、「過去のうちにただ現在の気がかりや問題の反映だけしか見ないという危険を冒しても」、「過去を」裁き、位置づけ、組織する歴史」、ないし「過去を自分のカテゴリーに封じ込めたつもりになり、過去についてわれわれが考えることへと過去を還元してしまうような、哲学の尊大さ」(AD33)である。

前者は、過去の或る時代を、他の時代や現在やあるいは歴史家とはいかなる関連もないまったく独立な個体ないし過去自体と見なすことによって、過去に対して客観的ないし傍観者の態度をとる歴史観であり、後者は、過去とは現在の単なる投影にすぎないものだと考えて過去を現在へ一方的に還元してしまう歴史観だと言えよう。

これら両極の歴史観に対して、ヴェーバーは、過去と現在、過去と歴史家のあいだに一方的な関係ではなく相互依存関係ないし「共存」を認めることによって歴史への接近可能性を認める。「理解することは歴史のなかでの共存 *coexistence* になる。この共存は、たんにわれわれと同時代のみならず、さらにはまたプラトンやわれわれの背後にあるものやわれわれの前方あるいはわれわれとはかけ離れたものにまで及ぶ」(SH16)。つまりヴェーバーは「過去に対するわれわれのかかり方」として「過去はわれわれのものであり、われわれは過去のものである」(AD33)とこう事態を基本に据える。この事態は、過去とわれわれを交流のない相互に独立な存在と見なすのでもなければ、一方が他方を支配するという関係でもない。言い換えれば彼の立場は、過去の独自性こそれとも現在を基準にした過去の裁断かという二者択一に陥ることなく、過去とわれわれとの「共存」・相互依存を前提にした歴史観である。このような「共存」によって「歴史の了解」が可能になるのは、われわれがみずからのうちに「われわれの生に意味を与えるような根源的選択の能力」あるいは「世界に対して意識的に態度をとって世界に或る意味を与える能力」を確認するからであり、またこの能力こそが他のさまざまな文化に開かれているからである。ヴェーバーによればこの能力こそが「文化的なもののすべての科学の超越論的条件」(AD35)である。

ヴェーバーは、過去自身についての証言を過去と現在との対話に求めることによって、客観的歴史と裁く歴史とを調停する。この調停を可能にするものは過去と現在のあいだの「共存」であり、現在が過去を捉え直すとともに現在を過去のうちに見届けることである。ヴェーバーの歴史哲学に促されつつメルロ＝ポンティは「歴史の了解」、「深い客観性」、「形而上学的事実としての歴史」について次のように語っている。

歴史の了解とは、恣意的に選んだカテゴリーの体系を持ち込むことではなくて、われわれが、われわれの

ものである過去を有し、他者の自由からなる多くの作品をわれわれの自由のなかで捉え直し、われわれの選択を通して他者の選択を照らし出すとともに他者の選択を通してわれわれの選択を照らし出し、相互の選択を修正しあい、かくして真理のなかに入る、というような可能性を想定することだけである。すべての歴史にとつての同一の源泉から汲み出そうとするこの要求以上に、大いなる敬意と深い客観性に値するものはない。歴史は外なる神でもなければ、われわれがその帰結を記録すればよいといった隠れた理性でもない。歴史とは、われわれの生であるこの同一の生がわれわれの内でも外でも、あるいは現在でも過去でも営まれていて、世界はさまざまに入り口をもつ体系であり、あるいはこう言つてよいであろうが、われわれは同類である、というようなこれらの形而上学的事実である。(ADD36)

第三節 歴史の不条理性と偶然性

しかしながら、単なる「共存」とか相互依存に基づく歴史の了解を語るだけでは、歴史哲学についてのおおざっぱな見通しを立てるにすぎないのではないだろうか。なぜならばこの場合には、歴史における偶然性の問題とか、歴史の了解が全面的に可能なのかそれとも限界をもつか、そしてもし限界があるとすればそれはどのような限界なのか等々の問題が等閑に付されたままだからである。

それゆえに以下においてはこれらの諸問題を踏まえながら、メルロ＝ポンティがみずからの歴史哲学の内実をどのように掘り下げているのかについて、いくつかの論点を指摘することにしよう。

過去と現在の「共存」に基づく歴史の了解にはさまざまな困難が伴うが、その困難の理由は、歴史そのものの不条理性や非合理性に存する。メルロ＝ポンティは歴史の不条理性をヴェーバーの歴史哲学のうちに見届けようとしている。

第一に、ヴェーバーによれば、歴史哲学とはけっして「歴史物語」(AD46)に終始するものではない。歴史哲学が歴史物語に墮するのは、知識と現実、理論と実践、認識と闘争、真理と決意を二元的に分断してそれら両項に二者択一を迫るからである。現実から遊離した知識、実践を踏まえない理論、闘争を知らない純粋な認識、決意とは無関係な真理などを歴史理解の基本に据えることによつて歴史が物語として語られてしまうのである。歴史の哲学とは「知識と現実との循環を切断することではなく、むしろこの循環そのものの省察である」(AD46-47)。

第二に、歴史とはあくまでも人間の実践に関わるものだとしても、歴史における実践とは、存在と当為の分離でも「価値と実効性、心情 *coeur* と責任の対置」でもない。カントの実践哲学は義務のための義務という義務論の立場から心情 *Gesinnung* の道徳性のみを強調し、行為の結果に対する責任を等閑に付する傾向が強いが、しかしながらヴェーバーにとつて肝腎なことは、心情倫理と責任倫理をたんに対立させておくことではなく、「いかにしてこの二者択一を乗り越えるべきかを示すこと」(AD44)である (CfHT XXXVI)。

第三に、歴史哲学においては、事実的状况から離れた審級として悟性や理性を措定することなどはできるものではないし、また「歴史の論理」とは、「理性的なものが現実的であり、現実的なものは理性的である」というヘーゲルの歴史哲学に存するのではない。それというのも、歴史的现实が「最終的に理性的であるのかどうかについてわれわれは確信がもてない」からである。このような歴史的状况のなかでは、「真理と自由を選択する人が、他の選択をする人々に対して彼らの不条理性を納得させることができるわけではないし、彼らをへ乗り越えた」などと思ひ込むこともできないのである」(AD42)。

第四に、メルロ＝ポンティによれば、「ヴェーバーの自由主義は、政治上の天国を要請することもなければ、民主主義の形式上の世界を絶対的だとも見なさない。彼は、すべての政治は暴力であり、民主政治もそれなりの仕方では暴力であることを認めてゐる」(AD42)。彼はヴェーバーの自由主義と対照的なカントの自由主義を、

道徳への政治の還元に基づく「民主主義についてのカント的幻想」とか「民主主義的樂觀主義」(AMI24)として批判している。またマルクス主義を擁護していたみずからの政治哲学への自己批判を込めて次のようにも語っている。

何をしようが真理であり、また証明も検証も必要のないようなマルクス主義は、歴史の哲学ではなかったし、それは偽・装・した・カ・ン・トであつた。さらに絶対的行動としての革命のうちにわれわれが最終的に見出したのもまたカントである。(AD339)

第五に、歴史における偶然性の問題に関しては次のように語られている。

理解可能な歴史の総体が偶然性との接触を遮断するわけではない。歴史が自己を把握し、自己を支配し、自己を正当化しようとして自己自身を振り返る運動もまた、なんら保証があるわけでもない。歴史は、弁証法的諸事実やわずかに示されるにすぎないさまざまの意味を伴つていて、理路整然とした推論ではないのだ。(AD40)

第六に、歴史における非合理性と合理性の関係について言えば、たしかに非合理的なものは合理的なものによつて包摂されるかもしれないが、しかしながらその包摂がかならずしも合理的なものを生み出すわけではなく、歴史においてはどのような予想外の事実が生じないとも限らない。それゆえに、誤謬を排除することができても「歴史は、誤謬の代わりに真実を代置する能力はない」。歴史には「一つの歴史的解決」とか「歴史の一つの目標」

(AD37) などにはありえないのであり、偶然性や非合理性や不条理性は、歴史の欠陥ではなく、むしろ歴史の原動力であり「歴史の論理」の可能性の条件だと言える。歴史とは、単一の目的に収斂するのではなく、進行方向も一義的ではないのであり、このような歴史の「厚み」や「下部構造の惰性」や「経済的かつ自然的でさえある諸条件の抵抗」(AD98) を踏まえることが歴史哲学の構想に際しては重要である。

社会的なものの厚みにおいてはそれぞれの決定には思いがけない結果が付きまとうが、他方それらの驚くべき結果に対して人間は問題をずらすような創意によって対応するので、希望のない状況などはありえないのだが、しかしまた逸脱を終わらせたり創意の力を失わせたり歴史を枯らしたりするような選択も不可能なのである。(AD37)

「社会的なものの厚み」はいかなる人間的実践や洞察によっても見透すことができるのではなく、また歴史にはつねに予想外の結果が随伴するものであり、しかもそれをたとえ合理化できたとしてもさらなる偶然が待ち構えており、その意味において歴史には人間のいかなる「創意」によっても制御できない側面が残らざるをえない。このような「歴史の厚み」を忘却して、人間の革命的实践によって歴史の変革を主張したのが「若きマルクス」や『歴史と階級意識』(一九三三年)のルカーチであった。(AD97-98)⁽⁶⁾

第四節 歴史の意味とその了解

メルロ＝ポンティによれば、歴史には目的がなく、また歴史は、一定の方向＝意味 sens に進むのではなく、

偶然性に晒されそれに動機づけられることによってさまざまな方向に意味が開かれている。それにもかかわらず「歴史は意味をもつ」。彼は歴史哲学をたえず言語論と類比的に考察しようとする。ソシュール言語学の影響から彼が得たことは、通時的に見られた言語体系(ラング)には一義的な論理ではないにしても「よろめく論理」「千鳥足の論理」が認められるということである⁽⁴⁾。そして言語構造と類比的に、歴史の構造にも偶然性に晒された「歴史の論理 logique de l'histoire」(CA86) というものがある。

それでは、メルロー・ポンティの言うところの「歴史の意味」とか「歴史の論理」とはどのようなことなのであろうか。

彼にとつて歴史の意味とは、第一に、個人によってあるいは共同体によって定立可能な実践的目的ではない。というのも歴史の意味は人間が意図的ないし意識的に作り出せるようなものではないからである。第二にそれは、例えばマルクス主義の史的唯物論におけるように、「階級闘争の原理」という「範型 pattern」⁽⁵⁾とかカテゴリーを歴史の全過程に当てはめることによって理解可能になるようなものでもない。第三に、既述のように、歴史の意味は、現在という到達点を基準にして過去の全体を都合よく振り返るような「回顧的合理化」によって統一的に把握できるものでもない。

歴史の意味とは、経済制度という下部構造によって上部構造が一方的に規定されるのではなく、経済や法律や宗教や科学などのさまざまな諸制度が無意図的に相互に他を表現し合いながら、それら諸制度相互の親縁関係が次第に明白になることによっておのずから生成してくるのである。このことを彼は「一枚の絵のもつ絵画的意味」(AD29) や「語られた言語 langage の意味」(AD30) にたとえている。

絵画的意味とは、画家のもろもろの所作を「あらかじめ」導くものというよりも、これらの所作から「お

の「ずと」生じてくるのであり、また所作とともに進展してゆくものである。あるいはさらに・・・語られた言語の意味とは、概念の形をとって、語り手の精神のなかや言語体系 language の何らかの理想的モデルのなかに移し置かれるのではなく、むしろ、ほとんど気づかれることなく収斂しあう一連の言葉 parole の作用の虚焦点にある。(AD30)

歴史は意味をもつのだが、しかし歴史は理念の純粋な発展ではない。歴史は偶然との接触において歴史の意味を形成するのであるが、それは、人間の創意 initiative が散乱した所与を捉え直すことによって生活組織「例えば法律、宗教、経済などの諸制度」を築き上げる場合においてである。(AD28)⁽⁶⁾

歴史の意味のこのような生成の在り方をメルロ＝ポンティは「歴史の構想力」と名づけている。歴史の構想力とは、けっして歴史をつくる人間の構想力を意味するのではなく、むしろ、人間の意図的ないし意識的な実践活動の無言の下部構造をなしている歴史自身が意味を湧出するさいに作動する構想力のことである。なぜ彼がこのような構想力を語るかと言えば、それは、歴史とは或る一定の構成的ないし一義的な概念に従ってその意味が形成されるものではないからである。歴史の意味は、人間の意図や目的や概念に基づいて構想されるものもなければ、神の摂理や絶対精神の自己目的に基づいて構想されるものでもない。歴史の意味は意図的に形成されるものではないどころか、同時にそれは偶然性との不可分な関係に晒されている⁽⁷⁾。

いつの日か「意味として」統一されうるであろう「歴史の」諸要素をあちこちにまき散らしておくのは、全能の理念ではなく「かといって、人間個人の天才性でも集団の目的意識でもなく」、一種の歴史の構想力

いある。(AD29) 強調は原著者)

歴史の意味はあとから回顧的に気づかれうるものなのであり、したがって歴史の意味はけっして神や絶対精神や人間などがあらかじめ意図的に定める到達目標ではない。というのも歴史の意味は絶対精神や人間によってまえもって見透すことのできるものではなく、歴史のさまざまな諸要素がおのずから親和することによって或る時代の核として生まれてくるものだからである。

歴史の構想力のもろもろの産物「宗教、法律、経済、科学技術など」相互の親和性 *affinité* が「おのずと」顕在化してきたときに、ついに歴史叙述は「ヴェーバーが言うところの近代社会の本質である」「合理化」とか「資本主義」ということを語り始めるのである。しかしながら歴史は「あらかじめ仮設された」或るモデルに従って働いているわけではない。歴史とはまさに意味の到来 *avènement du sens* なのである。(AD30)

西洋の法律、科学、技術、宗教のうちに、われわれは透かし模様のようにして「合理化」という意味を認めるのである。しかしこのことに気づくのはあくまでも事後的に *après coup* でしかない。これらの諸要素のそれぞれが歴史のこの意味を獲得するのは他の諸要素との出会いを通してのみなのである。(AD29)

ヴェーバーによれば、「今日の資本主義経済は一つの桁外れの巨大な宇宙」(AD27)なのであって、そのなかですべての人間は生まれ、そのなかで生きてゆかざるをえない。各人にとってこの資本主義の宇宙は人間の抵抗や呼びかけには安易に応答しないような「下部構造の惰性」として存在している。この宇宙の意味が「合理化」

や「資本主義」として登場してくるためには諸制度の「親和性」によるおのずからなる顕在化を待たなければならぬ。それにもかかわらず、「合理性の諸要素は、一つの体系に結晶化する以前にもすでに親縁関係をもっていた」(AD30)と語ってしまうのは「回顧的錯覚」にほかならない。文化の沈殿が「あとで気づきうるような、意味の創設 Stifting の事実」(PM63note)であるように、歴史の意味とは、歴史の方向性をあらかじめ規制するような目的や構成的原理のことではなく、あくまでもあとから生成し到来してくるものである。

このように歴史は「意味の到来」であるがゆえに、歴史はまた「シンボル体系の場」(AD98)とも呼ばれ、自然のように「認識」されるのではなく「了解」されるのである。

ところでそれでは、歴史の意味はどのようにして了解されるのであろうか。また、歴史の意味の了解にはどのような限界があるのだろうか。

歴史の了解は歴史の或る一つの内面を暴露してはくれるのだが、しかしながらそれは、歴・史・の・厚・み・と・偶・然を伴う経験的歴史の前ではわれわれを置き去りにしてしまうのであり、それゆえまた、この歴史をいかなる隠れた理性にも従属させるようなことはしない。(AD28)

ここでは歴史の了解についてのメルロ＝ポンティの限界意識が明確に語られている。歴史の了解は、経験的歴史のもつ「厚み」と「偶然」の前でおのれの有限性やパースペクティヴ性に気づかせられる。そのために歴史の全体を見透す透明な了解が不可能であることを自覚せざるをえない。歴史の了解を有限たらしめるのは「歴史の厚みと偶然」だと言えよう。ところがこの限界を十分に自覚しないままに、見透しがたい歴史の奥行や下部構造にたえきれずに歴史の偶然性と不透明性から逃れようとしてしばしば「隠れた理性」とか「外部の神」を要請

し、それによって歴史の了解の限界を逸脱してきたのが従来の歴史哲学であった。

おわりに

歴史の意味は、行為の目的のように人間が前もって設定できるものではない。マルクス主義は歴史の意味と歴史の目的（共産主義社会）とを混同するという誤りを犯すとともに、歴史の意味と、範型としての「階級闘争」の原理とを同一視してしまった⁸⁰。たとえ範型に従って過去の歴史全体を合理化することができたとしても、それはあくまでも「回顧的錯覚」にすぎない。歴史の意味はあとになって「到来」するのであり、それゆえにそれは合理的に説明されるのではなく、「回顧的」な仕方で了解されるのである。歴史の意味は「到来」するものであるがゆえにけっして「合理化」されるものではない。

註

メルロ＝ポンティのテキストからの引用箇所は以下の略号によって本文中に示す。邦訳のあるものについては参考にさせていただいたが、訳出はすべて筆者の責任による。引用文中の「」内および傍点は、とくに断りのないかぎり筆者によるものである。また、同じ頁からの引用が続く場合には、主として最後の引用箇所のみ頁数を記した。

- AD *Les aventures de la dialectique* Gallimard, 1955
 AM *Autour du marxisme dans Sens et non-sens* Gallimard, 1960
 CA *La conscience et l'acquisition du langage dans Psychologie et pédagogie de l'enfant, Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier, 2001
 HA *L'homme et l'adversité dans Signes*, Gallimard, 1960
 HT *Humanisme et terreur*, Gallimard, 1947
 PM *La prose du monde*, Gallimard, 1969

SH *Les sciences de l'homme et la phénoménologie*, Centre de Documentation Universitaire, 1953

- (1) メルロ＝ポンティの『西日本哲学年報』第二号、二〇一二年)。
言語哲学―(『西日本哲学年報』第二号、二〇一二年)。
- (2) ヘーゲルの歴史哲学についてのメルロ＝ポンティの解釈は、『歴史哲学講義』に対しては批判的であるが、『精神現象学』に対しては好意的であるというように、両義的である。この点については次の拙論の註(9)を参照。「メルロ＝ポンティの真理論における表現の問題」(九州大学大学院人文科学研究所『哲学年報』第六八輯、二〇〇九年)。
- (3) この点については次の拙論の第五章「言語と歴史」で詳論したのでそれを参照。「言語のダイナミズム」(九州大学大学院人文科学研究所『哲学年報』第七二輯、二〇一三年)。
- (4) ラングの「よろめく論理」「千鳥足の論理」については、本稿註(1)の拙論の「第二節、ラングの構造転換」を参照。
- (5) ハンナ・アレントによれば、マルクスは歴史の意味と歴史の範型を混同することによって歴史を一貫した論理によつて説明するところを誤り犯している。Cf.H.Arendt, *The concept of history: ancient and modern in Between Past and Future*, Penguin Books, 2006, pp.76-86。(引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間』みすず書房、二〇一一年、一〇一―一五頁)。
- (6) 『知覚の現象学』によれば、歴史の意味とは「あらゆる個人的決意に先立って社会的共存や〈ひと〉のなかで練り上げられている未来の、具体的企投である。…われわれが歴史に意味を与えはするが、それは歴史がわれわれに意味を提示するのではなく、われわれが歴史の主体は個人ではない」(PP313)。
- (7) 『知覚の現象学』においてはメルロ＝ポンティの基本的立場として世界の存在論的偶然性が強調されていたが、この考え方は彼の歴史論においても貫かれていと言えよう。例えば、『ビューマニスムとテロル』でのオイディプスの神話における「根本的偶然」(HJ XXXV)を参照。なお『知覚の現象学』での存在論的偶然性については、次の拙論を参照。「メルロ＝ポンティにおける知覚の弁証法と偶然性の問題」(九州大学哲学会編『哲学論文集』第三五輯、一九九九年)。
- (8) アレントは意味と範型の相違について次のように語っている。「範型を『つくる』ことはできるが、意味をつくることはできず、意味は、真理「や存在」と同様に、ただみずからを暴露し開示するだけである。マルクスは歴史家のなかでもっとも偉大な歴史家であり続けているが、しかし彼は範型を意味と取り違えた最初の歴史家にはかならなかった。…マルクス以来、歴史家たちは過去の錯綜した事実に対して自分たちの望むような範型を思いのままに押しつけてきた。その結果、外見上は高度に妥当する普遍的『意味』によって事実的で個別的なものが破壊され、それによって全歴史過程すなわち事柄の時間的継起に関する基本的な事実の構造が掘り崩されてしまった」(H.Arendt, *op.cit.*, p.81, 邦訳一〇八頁)。

